View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Nagasaki International University Academic Institutional Repository

研究ノート

# 非言語コミュニケーションと周辺言語

中　野　はるみ
（長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科）

要　旨

グローバル社会が到来し外国語教育の重要性が増していくにつれ、学習する外国語の背後にある外国の思想や地域文化、習慣もともに学習する必要性があることが認識され、非言語コミュニケーションの重要性が指摘されている。本稿では非言語コミュニケーションと周辺言語について、研究成果を追いその構成要素を調べた。加えて、発話を文字化したばあいに周辺言語がどのような表現になるのかを探るために、周辺言語を表現する語彙を抽出した。

キーワード
非言語コミュニケーション・周辺言語・文字化

## はじめに

コミュニケーションの重要性が指摘され、外国語教育に拍車がかかるグローバル社会が到来している。外国語教育の重要性が増していくにつれ、学習する外国語の背後にある外国の思想や地域文化、習慣もともに学習する必要性があることも認識されてきている。

コミュニケーションは、発話によるコミュニケーションと身ぶりや手ぶりなどの動作やもの言いなどによるコミュニケーションに大きく2分類される。後者は非言語コミュニケーションとよばれている。非言語コミュニケーションといえば必ず引用される Ray L. Birdwhistellは、

> Our present guess in that in pseudostatistics probably more than 30 to 35 per cent of a conversation or an interaction is carried by the words. Microcultural analysis offers objective measures of at least a portion of the remainder.[1)]

といい、「われわれの現在の推定では、会話やインターアクションの統計において、30ないし35%が言語によるものであろうが、文化のミクロ分析により、少なくとも残りの一部のコミュニケーションは客観的なものだ。」と述べている。ここでいう文化のミクロ分析とは、カメラ、テープレコーダー、ビデオフィルムなどを駆使して撮った Birdwhistell の記録のことで、人間行動を客観的に観察することをいう。このように、言語による情報判断が3分の1であり、残りの3分の2が非言語コミュニケーションによる情報判断だとしている。

これを受けて、Marjorie Fink Vargas は以下のように述べている。

> Ray L. Birdwhistell, a leader in the field of nonverbal communication, analyzes interpersonal communication this way：In a conversation between two people, only 35 percent of the social message is conveyed by the words. The remaining 65 percent is communicated nonverbally, by how they speak, move, gesture, and handle spatial relationships.[2)]

（非言語コミュニケーション研究のリーダーの一人、レイ・L・バードウィステル

は、対人コミュニケーションをつぎのように分析している。―「二者間の対話では、ことばによって伝えられるメッセージ（コミュニケーションの内容）は、全体の35パーセントにすぎず、残りの65パーセントは、話しぶり、動作、ジェスチャー、相手との間のとり方など、ことば以外の手段によって伝えられる」と。)[3]

日本語においても、「目は口ほどに物を言い」という諺にあるように、「情のこもった目つきは、口で話すのと同じほど相手に気持ちを伝え」[4]ることが認知されている。身ぶりや手ぶりなどの動作やもの言いなどによる非言語（ノンバーバル）コミュニケーションは、世界共通のものもあれば、それぞれの民族によって異なっているものもある。そうした異同に対する関心から、言語と文化、異文化理解の研究分野で、非言語（ノンバーバル）コミュニケーションの研究は広がりをみせてきた。

本稿では、これまでの非言語（ノンバーバル）コミュニケーション研究を素描したのち、とくに身ぶり手ぶりなどの動作が見えない状況下（たとえば電話など）で重要な要素となる「物腰」「もの言い」など聴覚で聞き分ける周辺言語（パラランゲージ）に焦点をあてる。

## Ⅰ．非言語（ノンバーバル）コミュニケーションの研究

非言語（ノンバーバル）コミュニケーション研究は、シカゴ大学で人類学を修めた Ray L. Birdwhistell がその嚆矢であるとされる。Birdwhistell はカメラフィルムを駆使した研究をおこない、Kinesics と Nonverbal Communication 研究の第一人者となり、1952年に *Introduction to Kinesics* と *Kinesics and Context* の２冊を出版している[5]。

その後、やはり人類学者の Edward T. Hall が、1959年に *The Silent Language*（邦訳『沈黙のことば』[6]）を出版し非言語（ノンバーバル）コミュニケーション研究の重要性を主張した。アメリカが世界政治をリードするという歴史的な時代を生きた Hall は長年、政府と民間企業のために海外で勤務する要員の選抜と訓練にあたってきた。その経験が非言語（ノンバーバル）コミュニケーションの重要性を Hall に気付かせたのである。アメリカ人の行動のおおくが「非言語的（ノンバーバル）言語」に無知なるがゆえに異文化間のコミュニケーションに困難が生じているというのである。その一例を少々長くなるが以下に引用してみる。協定をめぐるアメリカの代表者とギリシャ当局者との間の話し合いで起こったことである。

アメリカ側が交渉を進めようとして努力しても、ギリシャ側の抵抗と猜疑とがはね返ってきた。新しい計画を発足させるために必要な協定をとりつけることが、どうしてもできなかったのである。後になってしらべてみたところが、予測だにできなかった二つの理由が、この停滞の原因として明らかになった。第一に、アメリカ人というのは、まわりくどいことをいわず、あけすけであるのを誇りに思っている。しかしギリシャ人にとっては、率直さというのはむしろ欠陥とみなされており、繊細さの欠如を示すものとして、困ったことだと考えられている。第二に、アメリカ人は会合のお膳立てをするにあたって、時間をあらかじめどれだけと限り、原則的な事項で意見の一致がみられれば、細目にわたる事項の立案や起草は、小委員会に任すというやり方をとった。ところがギリシャ側はこれを、かれらをだますための方便だ、と考えたのである。ギリシャの慣例では、どんなささいなことでもすべて、全関係者の前でとり決め、会議には必要なだけの時間をかけることになっている。このような誤解の結果、何回となく会議が聞かれたものの、議事はさっぱり進展せず、お互いに相手方の行動をなじることに終始してしまった[7]。

このように、アメリカ人の「あけすけな」ものの言い方が、ギリシャ人にとっては「繊細さの欠如」を表すものの言い方と映り、お膳立てのやり方が慣習の違いから、騙しだとまで考え

られたのである。何度会合が持たれても、それぞれの「非言語的言語」の差異は明らかにならず、「お互いに相手方の行動をなじることに終始」するという外交交渉に陥ったという。Hallの訓練はもちろん、外国の言語、歴史、政治、習慣に及んでいたのだが、The Silent Languageすなわち「沈黙のことば」を正しく解釈すれば、こうしたこじれは回避できることを認識させたかったのであろう。

その後、Hallはproxemics（プロクセミックス）という用語を世に問うていくのである。proxemicsとは人間の空間利用への観察を基に展開した概念で、*The Silent Language*でも第10章で取り扱っている。1966年に著した*The Hidden Dimension*（邦訳『かくれた次元』[8]）は、Hallのproxemicsという概念を詳説した著作である。そこでは自分のproxemics（プロクセミックス）という概念は、Frants BoasやEdward Sapir，Leonard Bloomfieldなどの人類学者が1920年代に見出した「それぞれの語族はそれなりに独自のもの、一つの閉じた系であって、言語学者はそれぞれのパターンを明らかに記述せねばならない」[9]という、それまでのヨーロッパ語がすべての言語のモデルだという考えからの脱出を継承している。つまり、「言語とは単に思想を表現する媒体であるだけでなく、思想形成の一つの主要な要素であり、人間による世界の知覚は、その人のしゃべる言語によってプログラムされている」[10]という言語学の主張を、言語の差異だけでなく文化の差異にまで広げたのである。Hallは、「異なる文化に属する人々は、ちがう言語をしゃべるだけではなく、おそらくもっと重要なことには、ちがう感覚世界に住んでいる」[11]ことだとしてその例をproxemics（プロクセミックス）という概念を用いて実証していったのである。

70年代に入り、心理学者Albert Mehrabianが、*Silent Messages*を著した。Mehrabianによれば、Face to Face Communicationにはface（facial），tone of voice（vocal），words（verbal）という3つの要素があり、通常それら3つの要素は統一されたメッセージを送っている。しかし、3つのメッセージがお互いに矛盾した内容を送っているばあい受信者はどう受信するのか。たとえばことばでは、「君は悪くなんかないよ」といっているのに、声のトーンを沈ませ、表情は目線を合わせないといった3つの要素間に不一致や矛盾を生じさせる場面ではどうであろうか。Mehrabianはこのような場面を設定して実験をおこない、メッセージの受信者は異なる情報をどの回路からどのぐらい受けとっているかを調べたのである。その結果、受信者が受けるメッセージ伝達に占める割合は55% Facial，7% Verbal，38% Vocal，であったという。Mehrabianは、face（facial）とtone of voice（vocal）による非言語コミュニケーション（38＋55＝93%）のほうが、言ったとおりのことば（7%）よりも信用されるという実験結果を得たのである。これは、‘The Rule of Mehrabian’（メラビアンの法則）‘7%–38%–55% Rule’（7–38–55のルール）または、「言語情報＝Verbal」「聴覚情報＝Vocal」「視覚情報＝Visual」の頭文字を取って‘3V Rule’（3Vの法則）と呼ばれている。このように、ことば以外の要素に重要なメッセージを読み取るということが明らかになり、非言語コミュニケーションの重要性を指摘するところとなったのである。

しかし、この法則は一人歩きをはじめ、どんな状況でも非言語コミュニケーションの割合が93%であるというふうに捉える人々がでてきた。これには、Mehrabian自身がつぎのように警鐘を鳴らしている。

> Please note that this and other equations regarding relative importance of verbal and nonverbal messages were derived from experiments dealing with communications of feelings and attitudes（i.e., like–dislike）. Unless a communicator is talking about their feel-

ings or attitudes, these equations are not applicable.[12)]

あくまでも感情や態度、すなわち、好悪の感情のメッセージを扱ったばあいの割合が「7・38・55」であって、単に事実のみを伝えたり要望をしたりするコミュニケーションのばあいには無関係であるとしている。メッセージの受け手が声の調子や身体言語といったものを過度に重視するのは考えものだというのである。

とはいえ、非言語（ノンバーバル）コミュニケーション研究は、グローバル化と情報化が進む現代社会のなかで、ますますその重要度が増してきているようである。非言語（ノンバーバル）コミュニケーションの研究は、大学生の就職活動時の面接にも影響し、研究成果が積極的に応用され始めているようにみうけられる。

## II. 非言語（ノンバーバル）コミュニケーションの分類

異文化接触場面のみならず、通常の対人関係においても重要性を認識されてきた非言語（ノンバーバル）コミュニケーションはどのような構成になっているのだろうか。*Louder than Words : An Introduction to Nonverbal Communication* で、Marjorie Fink Vargas は、非言語（ノンバーバル）コミュニケーションをつぎの９つに分けている[13)]。

1. THE HUMAN BODY, those genetically related physical characteristics of the sender or receiver that give a message, such as sex, age, physique, or skin color
2. KINESICS, the language of body position and movement
3. THE EYES, their contact and use
4. PARALANGUAGE, those voice qualities and characteristics that accompany spoken words
5. SILENSE
6. TACESICS AND STROKING, the language of touch and its substitutes
7. PROXEMICS, the way that humans use apace to communicate
8. CHRONEMICS, time in both its cultural and physiological dimensions
9. COLOR　　（下線は筆者）

これは、石丸正によって、下記のように訳出されている[14)]。周辺言語は、「しゅうへんげんご」というルビになっていて、本稿のように「パラランゲージ」とはしていない。

1）人体（コミュニケーション当事者の遺伝因子に関わるもろもろの身体的特徴の中で、なんらかのメッセージを表わすもの。たとえば性別、年齢、体格、皮膚の色など）
2）動作（人体の姿勢や動きで表現されるもの）
3）目（「視線（アイ）の交差（コンタクト）」と目つき）
4）周辺言語（しゅうへんげんご）（話しことばに付随する音声上の性状と特徴）
5）沈黙
6）身体接触（相手の身体に接触すること、またはその代替行為による表現）
7）対人的空間（コミュニケーションのために人間が利用する空間）
8）時間（文化形態と生理学の二つの次元での時間）
9）色彩　　（下線は筆者）

先に紹介した Ray L. Birdwhistell の KINESICS は「動作」に、Edward T. Hall の PROXEMICS は「対人的空間」にそれぞれ訳出されている。

また、Paul Ekman, Wallace v. Friesen, *The Repertoire of Nonverbal Behavior : Categories, Origins, Usage, and Coding* は、動作や表情をつぎの５種に分類している[15)]。それぞれの内容をまとめた文を以下に示しておく。（　）内は石丸正の訳語である[16)]。

1. EMBLEMS（表象動作）：Emblems are those nonverbal acts which have a direct verbal translation, or dictionary definition, usually consisting of

a word or two, or perhaps a phrase.（p. 63.）

2. ILLUSTRATORS（例示動作）BATONS, IDEOGRAPHS, DEICTIC, SPATIAL, KINETOGRAPHS, PICTOGRAPHS：They are movements which are directly tied to speech, serving to illustrate what is being said verbally.（p. 68.）
3. AFFECT DISPLAYS（感情表出動作）：（They are）the movements of the facial muscles in association with primary affects. List of primary affects：happiness, surprise, fear, sadness, anger, disgust and interest.（pp. 70–71.）
4. REGULATORS（言語調整動作）：These are acts which maintain and regulate the back－and－forth nature of speaking and listening between two or more interactants. They tell the speaker to continue, repeat, elaborate, hurry up, become more interesting, less salacious, give the other a chance to talk, etc.（p. 82.）
5. ADAPTERS（適応動作）：We use the term ADAPTORS because we believe these movements were first learned as part of adaptive efforts to satisfy self or bodily needs, or to perform bodily actions, or to manage emotions, or develop or maintain prototypic interpersonal contacts, or to learn instrumental activities.（p. 84.）

EMBLEMS とは、いわゆる無音のサインのことである。たとえば海の底で音声でのコミュニケーションが不可能なばあいにスキューバー・ダイバーがことば以外の意思伝達をする動作などであるが、これらはことばが通じる者同士、身うち、グループ内、同文化圏内でしか通じない動作である。表象動作は、それを使用する人たちによって考案されるものもおおい。

ILLUSTRATORS とは、ことばによるメッセージをさらに強めるために付随している動作で、BATONS, IDEOGRAPHS, DEICTIC, SPATIAL, KINETOGRAPHS, PICTOGRAPHS の６種がある。発話にともなう手振り、たとえば道を教えるときに進路を手で示したり、賛成のときにうなづいたり、反対のときには首を横に振ったりなどの身ぶり、絵や字なども ILLUSTRATORS に入っている。

AFFECT DISPLAYS とは、顔の表情をはじめとした個人の情緒的な反応のことである。Albert Mehrabian の実験にみられるように、メッセージの占める割合が face 55%であったところをみても非言語（ノンバーバル）コミュニケーションでは AFFECT DISPLAYS は大きな要素であるといえる。

REGULATORS とは、発話を促したり遅らせたりする調整や動作のことである。聞き手は話を続けさせるために、うなづいたり、目配せしたり、あいづちを打つなどする。

ADAPTERS には、さまざまな課題遂行のために人がおこなう動作すべてが入る。「適応」という用語を用いるのは、人がまず初めに習うことは自分のさまざまな動作をいかに適応させるかだからである。

このように、Paul Ekman, Wallace v. Friesen の５分類で非言語（ノンバーバル）コミュニケーションに関係するのは、EMBLEMS, ILLUSTRATORS, AFFECT DISPLAYS, REGULATORS の４種である。このうち次章で述べる周辺言語（パラランゲージ）は、以下の表でわかるように、ILLUSTRATORS と REGULATORS にまたがってる。

こうしたまたがりがみられるのは、ILLUSTRATORS に発話内容にともなうリズムやアクセントが入り、REGULATORS に聞き手の発話表現である「あいづち」などが入るからである。

**ILLUSTRATORS, AFFECT DISPLAYS と発話関係**

| | ILLUSTRATORS：BATONS, IDEOGRAPHS, DEICTIC, SPATIAL, KINETOGRAPHS, PICTOGRAPHS | REGULATORS |
|---|---|---|
| relation to words | directly tied to speech, illustrate message content, or rhythmically accent or trace ideas | maintain and regulate back－and－forth conversation flow, not tied to specifics of speech |

Paul Ekman, Wallace v. Friesen, *The Repertoire of Nonverbal Behavior : Categories, Origins, Usage, and Coding*（pp. 94-95.）の表より筆者が作成。

## III. 周辺言語（パラランゲージ）の研究

耳で聞き分ける発話者のことば以外のメッセージを paralanguage ＝周辺言語（パラランゲージ）という。paralanguage は、para と language を合わせたことばである。ギリシヤ語の para は beside, beyond, amiss のことであり、paralanguage の para は、「…関係がある、準…の（near, subordinate）」の意である[17]。また、Marjorie Fink Vargas はつぎのように paralanguage を解説している[18]。

> Paralanguage, sometimes called vocalics, includes all stimuli produced by the human voice（with the exception of the words themselves）that can be heard by another human. This includes widely divergent cues ranging from forceful articulation, screaming, and deep resonance to whining, monotones, and vocalized pauses.

時に vocalics とも呼ばれる paralanguage には、forceful articulation（力のこもった叫び）、screaming（悲鳴）、deep resonance to whining（太く低い共鳴音）、monotones（単調音）そして、vocalized pauses（声に出して一息つくときの呼吸音）など多種多様な Cues が含まれるとしている。

また、最も早く paralanguage の系統的分類を提唱したのは George Trager であった。George Trager はつぎのような分類をおこなっている[19]。

**George Trager の Paralanguage の分類**

- ・Voice Qualities（声の性状的要素）
  - ・Pitch Range（声の高低域）
    - Spread upward or downward
    - Narrowed from above or below
  - ・Vocal Lip Control（唇の使い方）
    - Rasp-heavy or plain
    - Openness-slight or full
  - ・Glottis Control
    - Voicing-over or under
    - Breathiness slight or heavy
  - ・Pitch Control
    - Sharp Transitions
    - Smooth Transitions
  - ・Articulation Control（発音の仕方）
    - Forceful and relaxed Speech
  - ・Rhythm Control（リズムのとり方）
    - Smooth and Jerky
  - ・Resonance（共鳴）
    - Resonant to Thin
  - ・Tempo（テンポ）
    - Increased or decreased from Norm
- ・Vocalizations（発生的要素）
  - ・Vocal Characterizers（発声上の特徴性）
    - Laughing, Crying, Giggling, Snickering, Whimpering, Sobbing, Yelling, Whispering Moaning, Groaning, Whining, Breaking, Belching, Yawning
  - ・Vocal Qualifiers（発声上の限定性）
    - Intensity（over loud to over soft）
    - Pitch height（over high to over low）
    - Extent（drawl to clipping）
  - ・Vocal Segregates（発声上の遊離素）＝ Vocalized pauses（つなぎの音声）
    - Un-un, Uh-huh, Uh, Sh

‘Paralanguage：A First Approximation[19]’を参照し筆者が作成した。（　）は『非言語コミュニケーション』における石丸正の訳語である。

さて、日本語の paralanguage の研究はどのようになっているのだろうか。

上野田千鶴子は「文法とイントネーション」で、「コレ」と「ハイ」を取りあげ、その意味の異同とイントネーションの異同関係を説明している[20]。

まず、「コレ」については、３つのパターンをあげている。

①「コレがいい」「コレを下さい」といった意味を表すとき
→ほとんど平らに短く発話する。

②「コレですか」と問いかける時
→「レ」の部分を高くし、多少引き延ばす調子で発話する。

③「本当にコレ」と思案しながら問いかける時
→①と同様に平らな抑揚をもち、「レ」の部分を引き延ばす。

つぎに、「ハイ」については、異なるばあいを７つあげているが、それらのイントネーションの異同については記述がない。

① 依頼や命令に喜んで応じる「ハイ」
② 依頼や命令に厭々ながら応じる「ハイ」
③ 電話がかかってきた時に受話器をとって答える「ハイ」
④ 電話の途中で相手に対して何度か応じる「ハイ」
⑤ 人に物を差し出す時の「ハイ」
⑥ 授業中に先生に指されて答える「ハイ」
⑦ 先生の質問に答えるべく手を上げながら発する「ハイ」

このような例からもイントネーションが、叙述文、疑問文、命令文、依頼文など発話者の表現意図を担う要素であることがわかる。イントネーションの研究は、音声情報の基本周波数のピッチパターン（音の高さ）やポーズを測ることによって科学的に分析されてきている。

郡史郎は「聞き手に対する訴えかけの焦点（フォーカス）」を扱った「強調とイントネーション」で、フォーカス（プロミネンス）があるその語の音調だけではなく、文全体の音調、すなわちアクセントやイントネーションに関わることを明らかにし、発音による強調法を４種あげている[21]。これらの強調法は感情の反映が強く、ことばの知的内容だけではなく、自分の感情を同時に相手に訴えかけているのである。

① ふだんよりりきんだ発音
りきむといっても音の高さの変化が重要である。感嘆、嫌悪、いらだち、怒りのどのタイプにもともなう。一般に感情が強ければ喉頭に過度の緊張が加わりやすいが、日本語では語頭の子音が強く帯気化し、声帯振動を欠いた気息性の強い発音になる。

② 母音の延伸と促音・撥音の挿入
イ形容詞・ナ形容詞、副詞を強調するばあい、母音の長さを伸ばし、語の一拍目の後に促音や撥音を挿入して感嘆や嫌悪の感情の強調効果を高める。「すごい」「高い」が「スゴーイ」「タカーイ」になり、アクセントも「ス「ゴー」イ」と母音まで高くなったり、「スゴ「ー」イ」のように、伸ばされた母音をアクセント核にするばあいもあったりする。「スッゴイ」や「スンゴイ」のように促音や撥音の挿入もある。副詞は、二拍目が促音になっているものは、「ユーックリ」のように語頭拍の母音が伸びやすい。

③ テンポの遅延と語末拍上昇
「帰ると言ったら　か　え　る！」のように、強調したい部分をことさらゆっくりと一拍一拍念を入れて訴えかけるように発音する。カエルが強調されるとき、語句の最後の拍が高められるのがふつうである。いらだちや怒りなどの感情をともなったばあいと、言い聞かせ、新しいことばを教えるばあいなど特別な感情をともなわないばあいもある。

④ 拍ごとのポーズ挿入
強調したい語の各拍の前後を切って発音する。「厭だと言ったら　い　や　な　の！」

のようなばあいである。強いいらだちや怒りをともなうことがおおい。

杉藤美代子は「談話におけるポーズとイントネーション」で、座談資料、テレビニュースのアナウンサーの音声資料、宇野重吉の語り聞かせの３種における発話時間とポーズの時間関係および発話速度の変化の実態を分析している[22]。「ポーズをすべて取り除いた音声による聴取実験からは、ポーズが話し手にとって欠くことができないものであると同時に聞き手にとっても情報処理のために必要な時間であること」や「ポーズは、声を高めるための準備時間であること」など、ポーズと強調のためのイントネーションが深くかかわっているとしている。語り聞かせでは、同じオノマトペ[23]を声の大小によって「距離感」を表現しているようである。

上記の研究をみても、周辺言語（パラランゲージ）の具体的な研究分野は、イントネーション、プロミネンス、ポーズ、リズム、アクセント、モーラ研究のほか、声の大きさ、高さ、長さ、強さ、速さ、硬さ、舌うち、うなづき、喜怒哀楽などの感情や心理がいかに声へ反映するかなど多岐にわたっている。いずれにせよ、音響機器や音響分析機器の発達がこれらの研究をさらに精緻化していくことになるだろう。

## IV. 周辺言語（パラランゲージ）の文字化

周辺言語（パラランゲージ）は発話において「ことば」以外の方法でメッセージを聞き手にあたえることをいう。したがって、周辺言語（パラランゲージ）は非言語（ノンバーバル）コミュニケーションの一種に分類されよう。しかし、それらは「ことば」（発音・意味）と切っても切れない関係にある非言語（ノンバーバル）コミュニケーションなので、先に記したとおり、イントネーション、プロミネンス、ポーズ、リズム、アクセント、モーラ研究のほか、声の大きさ、高さ、長さ、強さ、速さ、硬さ、舌うち、うなづきなどで発話者の喜怒哀楽などの感情や心理が具現化される。

では、音のない「書きことば」では、発話者の意図や感情や心理を表す周辺言語（パラランゲージ）はどのように表現されるのであろうか。

文字表現における「会話」（携帯電話でのメールを想起してほしい）は、本来、漢字とひらがな表記のところをわざとカタカナ表記にしたり、「。」「、」「！」「？」「ー」「〜」「…」などの記号やブランクを使ったり、最近では顔文字などによって表したりするが、地の文では周辺言語（パラランゲージ）を表現する語彙や語彙と語彙の組み合わせなどで表現せざるをえない。

以下のような動詞、イ形容詞、ナ形容詞、副詞、名詞などの組み合わせを駆使して表現するのである。そのいくつかの語彙をあげておこう。さまざまな分類が考えられようが、本稿では不十分ではあるが形態と意味の両面から、〈動詞〉〈修飾語〉〈名詞〉と大きく３分類することとした。泣き笑いに関する語彙も声（息）をともなう表現であり、沈黙もメッセージを発する周辺言語（パラランゲージ）の要素なのでここに含めておく。

〈動詞〉

まず抽出されるのは、つぎのような動詞表現である。形態からつぎのＡ〜Ｃの３種に分類できる。

Ａ．一単語で周辺言語（パラランゲージ）表現を含んでいる動詞

Ｂ．複合動詞で周辺言語（パラランゲージ）表現を含んでいる動詞

Ｃ．他の周辺言語（パラランゲージ）表現とともに使われる動詞

意味的な分類に関してはそれぞれ、できるだけ下位分類してみるが、重複するものもおおいので、現段階では下記のようになる。また、「のたまう」「ほざく」「こく」のように話し手本人が自分自身の周辺言語（パラランゲージ）に使えない表現も存在する。これらは、聞き手の話し手に対する待遇表現であり、「うやまい」や「いやしめ」の意が含まれた表現である。このように、使用に限定がある動詞には下線を付しておく。なお、動

詞は述語に使用されるほか、名詞修飾語にもなる。(順不同)

A．一単語で周辺言語(パラランゲージ)表現を含んでいる動詞

［音の大きさ関係］

・叫ぶ・(声を)はりあげる・おらぶ・怒鳴る・わめく・吠える・つぶやく・囁く・口ごもる

［声音関係］

・吟ずる・口説く・誦する・唱える・かすれる・唸る・うめく・しわがれる・力む

［内容関係］

・愚痴る・こぼす・かこつ・なげく・ぼやく・けなす・慰める・ねぎらう・威張る・やじる・なじる・そしる・ののしる・おだてる・はやす・からかう・おどす・こく・ほざく・こびる・ほのめかす

［感情関係］

・しょげる

［人間関係］

・のたまう

B．複合動詞で周辺言語(パラランゲージ)表現を含んでいる動詞

［言い方］

・言い合う・言い争う・言い返す・言い切る・言いくるめる・言いこなす・言いさす

・言いすくめる・言い渋る・言い過ぎる・言い捨てる・言い損なう・言い立てる

・言い散らす・言い繕う・言い続ける・言い連ねる・言いつのる・言い通す

・言い放つ・言い含める・言いふらす・言いなす・言いのける・言いまくる

・言い渡す・言いまるめる・言いよどむ・言いよる・張り上げる・まるめこむ

・ものいう・仰せられる・仰せつける・説き伏せる・説きつける・まくし立てる

・申し聞かせる・申しつける・申し渡す・呼びかける・呼びたてる・いきり立つ

・猛り立つ・息巻く・こきおろす・こびへつらう

［泣き方］

・すすり泣く・むせび泣く・泣きじゃくる・しゃくり上げる・泣き叫ぶ・泣きしきる

・泣き濡れる・涙ぐむ・涙する・しのび泣く・泣き伏す

［笑い方］

・あざ笑う・せせら笑う・笑いこける・笑い飛ばす・吹き出す

［黙り方］

・黙りこくる・押し黙る・黙する

C．他の周辺言語(パラランゲージ)表現とともに使われる動詞

・言う・伺う・語る・聞く・答える・質問する・しゃべる・尋ねる・問う・叫ぶ・泣く

・話す・はやす・笑う・微笑む・笑む・響く・さえわたる・つまる・(声を)はる

・(啖呵を)切る

〈修飾語〉

名詞を形容する修飾語(連体修飾)には、つぎのような「イ形容詞」「ナ形容詞」、「動詞のル形やタ形」、「慣用句」がある。たとえば、それぞれ「明るい声で」「静かな答は」「浮き浮きした語りの」「けろりとした口ぶりが」などの表現である。また、形容詞のそれぞれは、「〜く」と「〜に」の形で副詞と同じ働きをする。たとえば、「口汚くののしる」「にこやかにしゃべる」などである。そこで、ここにはいわゆる連用修飾といわれる、動詞を修飾する「副詞」も加え、「修飾語」には、ひとまず下記の５種をあげておく。

A．イ形容詞

B．ナ形容詞

C．動詞のル形・タ形
D．慣用句
E．副詞

なお、修飾語の分類は、その修飾語感が〈好意的語感〉であるか、それとも〈批判的語感〉であるか、そのどちらでもない〈中立的な語感〉であるかの３種にまずは分けてみる[24]。発話に対する筆者の視点により修飾語の選択がなされるわけだが、単語は文や文章の構成成分なので、文や文章中の他の単語との関係によって語感の変容はあり得る。したがって、１単語の語感を３種のうちの１分類に決定するのは難しいのであるが、一応のところ分類しておく。副詞のうち、オノマトペはそれぞれ分類にした。

A．イ形容詞
〈好意的語感〉
・明るい・甘い・美しい・嬉しい・面白い・快い・心地よい・よい・すがすがしい・暖かい・楽しい・好ましい・渋い
〈批判的語感〉
・息苦しい・陰気くさい・重苦しい・うるさい・悲しい・うら悲しい・もの憂い・暗い・もの悲しい・くだくだしい・くどくどしい・口汚い・汚い・口はばったい・口やかましい・騒がしい・騒々しい・甲高い・けたたましい・情けない・嘆かわしい・やかましい・うっとおしい・こうるさい・仰々しい・寂しい・侘しい・もの寂しい・うら寂しい・長たらしい・長々しい・くどい・まわりくどい・もどかしい・いらだたしい・じれったい・まだるっこい・苦しい・辛い・切ない・やるせない・やりきれない・腹立たしい・苦々しい・いまいましい・悔しい・口惜しい・心細い・恐ろしい・気味悪い・不気味・厭わしい・おぞましい・うとましい・憎い・憎らしい・憎々しい・しゃらくさい・小賢しい・胸糞が悪い・黄色い・冷たい・甘ったるい・ねばっこい
〈中立的な語感〉
・大きい・小さい・高い・低い・強い・弱い・重々しい・太い・細い・か細い・鋭い・丸い・速い

B．ナ形容詞
〈好意的語感〉
・快適な・きれいな・さわやかな・爽快・痛快な・なごやかな・静かな・にこやかな・やわらかな・なめらかな・陽気な・元気な・愉快な・ひそやかな・まろやかな・積極的な
〈批判的語感〉
・陰気な・大げさな・口重な・舌足らずな・まことしやかな・迷惑な・でたらめな・不愉快な・不機嫌な・派手な・うつろな・否定的な・乱暴な・反抗的な・消極的な・居丈高な・冷やかな
〈中立的な語感〉
・かすかな

C．動詞のル形・タ形
〈好意的語感〉
・とおる・張りのある・浮き浮きした・かしこまった・はずんだ・(憂い・悲しみ等）含んだ
〈批判的語感〉
・浮いた・上ずった・沈んだ・しゃがれた・濁った・とがった・震えた・湿った

D．慣用句
〈好意的語感〉
・玉を転がすような・銀の鈴をふるような・歯に衣着せぬ・ドスのきいた
〈批判的語感〉
・糠味噌の腐りそうな・割れ鐘のような・とげのある・蚊の鳴くような・歯の浮くような・奥歯にものの挟まったような・絹を裂くような

E．副詞

〈好意的語感〉

・あっさり・あっけらかんと・おっとり・けろりと・きっぱり・さっぱり・さらりと・とうとうと・のんびり・はっきりと

〈批判的語感〉

・頭ごなしに・居丈高に・高圧的に・高飛車に・むかっと・のろのろ

〈中立的な語感〉

・しょんぼりと・しんみり・ゆっくりと

【オノマトペ】

聞き手が感じる発話に含まれる微妙な感情を表しているのがつぎのようなオノマトペである。下記のように言い方に関しては批判的な語感をともなったものがおおいが、なかには、そのスピードや声の大きさを含んだ中立的な語感の表現もある。通常は、「～と」「～した」の形で副詞表現になる。

［言い方］

〈好意的語感〉

・わくわく・すらすら・はきはき・ばりばり

〈批判的語感〉

・あきあき・いじいじ・がたがた・がさがさ・がみがみ・がんがん・きんきん・くどくど・くだくだ・ぐちゃぐちゃ・ごちゃごちゃ・こそこそ・ざらざら・しどろもどろ・つべこべ・ぽんぽん・まごまご・ずけずけ・ずばずば・せかせか・だらだら・ねちねち・へらへら・ぺちゃくちゃ・ぺらぺら・ぺちゃぺちゃ・ぼそぼそ・べらべら・ぺらぺら・ぶうぶう・ぶつぶつ・ひそひそ・ぼそっと

〈中立的な語感〉

・とつとつ・黙々・ぽつぽつ・ぽつりぽつり・わいわい

［泣き方］

〈批判的語感〉

・めそめそ・ぴいぴい

〈中立的な語感〉

・おいおい・おろおろ・おんおん・さめざめ・しくしく・ぽろぽろ・ぼろぼろ・わあわあ・わんわん

［笑い方］

〈好意的語感〉

・ころころ・にこり・にっこり・にこにこ

〈批判的語感〉

・にたにた・にたり・にっと・にんまり・にやにや・けらけら・げらげら

〈中立的な語感〉

・からから・くつくつ・くすくす・くすり

〈名詞〉

名詞表現も、「好意的語感」「批判的語感」「中立的な語感」と「何らかの形容語がついて用いられる名詞」の４種（A～D）にまずは分類してみる。これらの名詞は「する動詞」や「他の周辺言語（パラランゲージ）表現とともに使われる動詞」とともに使用されるほか、いわゆる助詞とともに使用されて周辺言語（パラランゲージ）表現になる。

A．好意的語感

・談笑・懇談・力説・断言・明言・言明・確言・喝破・感動・感激・感心・喜び

・歓喜・有頂天・激励・謙遜・口まめ・笑い・笑み・微笑み・スマイル・哀愁

・ペーソス・悲哀

B．批判的語感

・金切り声・だみ声・どら声・鼻声・叫び声・怒号・絶叫・猫撫で声・言いがかり

・言いぐさ・言い過ぎ・おしゃべり・おせっかい・陰口・軽口・口上手・口達者

・口八丁・強弁・言挙げ・捨て台詞・多弁・冗長・口下手・訥弁・物言い・ろれつ・だんまり・うんざり・げんなり・憂鬱・苛立ち・慟哭・怒り・憤り・腹立ち・哄笑・立腹・怒気・憤慨・気おくれ・畏縮・おじけ・頭ごなし・早口・自慢・高笑い・爆笑・呵呵大笑・薄笑い・薄ら笑い・冷笑・嘲笑・物笑い・自嘲・生意気・皮肉

・（利いた）風・お世辞

C．中立的な語感

・小声・大声・大音声・悲鳴・激昂・驚き・驚愕・驚嘆・愕然・呆気・黙秘

・びっくり・沈黙・無口・無言・沈痛・悲痛・悲愴・号泣・大笑い

D．何らかの形容語がついて用いられる名詞

・声・声色・声音・声つき・口調・語気・語り口・歯切れ・口ぶり・口つき・口先

・言い回し・舌鋒・舌先・説得・誇張・強調・ことば・調子・リズム・抑揚・テンポ・イントネーション・ニュアンス・響き

## おわりに

本稿では、ますますグローバル化を加速する現代、重要性が指摘されている非言語（ノンバーバル）コミュニケーション、そして特に周辺言語（パラランゲージ）について考察してきた。非言語（ノンバーバル）コミュニケーションが、ある一定の文化によって規定されていると同様、周辺言語（パラランゲージ）もすべての文化に共通しているわけではない。イントネーション、プロミネンス、ポーズ、リズム、アクセント、モーラの違いはもちろん、声の大きさ、高さ、長さ、強さ、速さ、硬さ、舌うち、うなづき、喜怒哀楽などの感情や心理がいかに声へ反映するかなども、生理的に生来持っている特質によるよりも文化的な規定によって使い分けている（意識するとしないとにかかわらず）といったほうがいいだろう。人は言語を習得するように、周辺言語（パラランゲージ）も習得してきているといえよう。本稿では、発話を文字化したばあいに日本語の周辺言語（パラランゲージ）表現にどのような表現があるかいくつかの語彙を抽出してみたのであるが、今後よりいっそうの精緻化が必要になってくるだろう。

なお、本稿は和語に関して、なるべく漢字表記をもちいない方針で書いているので、通常の論考にくらべて「ひらがな」表記がおおい。

注

1）Ray L. Birdwhistell, *Kinesics and Context : Essays on Body Motion Communication,* Univ. of Pennsylvania Press Philadelphia, 1970, pp. 157–158.

2）Marjorie Fink Vargas, *Louder than Words : An Introduction to Nonverbal Communication,* Iowa State Univ. Press, 1986, p. 10.

3）マジョリー・F・ヴォーガス（石丸正訳）『非言語コミュニケーション』新潮選書，1987，p. 15.

4）尚学図書編『古事ことわざの辞典』小学館，1986，pp. 1143–1144.

「目は口ほどに物を言い」は，「気があれは目も口ほとにものをいひ」からきており，その出典は，1801の『柳多留拾遺一八上』となっている．

5）・Ray L. Birdwhistell, *Introduction to Kinesics : An Annotation System for Analysis of Body Motion and Gesture,* Foreign Service Institute, 1952.

・前掲 *Kinesics and Context : Essays Body Motion Communication.*

6）エドワード・T・ホール（国広正雄・長井善見・斉藤美津子訳）『沈黙のことば』南雲堂，1966.

7）前掲『沈黙のことば』p. 10.

8）エドワード・ホール（日高敏隆・佐藤信行訳）『かくれた次元』みすず書房，1970.

9）前掲『かくれた次元』p. 4.

10）前掲『かくれた次元』p. 4.

11）前掲『かくれた次元』p. 5.

12）http://www.kaaj.com/psych/smorder.html

13）Marjorie Fink Vargas, *Louder than Words : An Introduction to Nonverbal Communication,* Iowa State Univ. Press, 1986, pp. 10–11.

14）マジョリー・F・ヴォーガス（石丸正訳）『非言語コミュニケーション』新潮選書，1987，p. 16.
本稿では「しゅうへんげんご」というルビはふらず、その音を生かすようにした。

15）Paul Ekman, Wallace V. Friesen,‘ The Repertoire of Nonverbal Behaver：Categories, Origins, Usage, and Coding’, *Semiotica 1,* 1969, pp. 49–98.

16）前掲『非言語コミュニケーション』p. 48.

17）小稲義男編『新英和大辞典』第五版，研究社，1980.

18）前掲『非言語コミュニケーション』p. 68.

19）George L. Trager, ‘ Paralanguage：A First Approximation’ *Studies in Linguistics 13,* 1958,

pp. 1–12.

20）上野田千鶴子「文法とイントネーション」杉藤美代子編『講座　日本語と日本語教育　第２巻　日本語の音声・音韻㈠』明治書院，1989，p. 299.

21）郡史郎「強調とイントネーション」『講座　日本語と日本語教育　第２巻　日本語の音声・音韻㈠』pp. 330–334.

22）杉藤美代子「談話におけるポーズとイントネーション」『講座　日本語と日本語教育　第２巻　日本語の音声・音韻㈠』pp. 343–364.

23）このオノマトペとは，「タッタッタッタッタッ」である．

24）「肯定的語感」「否定的語感」または「プラス語感」「マイナス語感」などを考慮した結果，「好意的語感」「批判的語感」という名称にした．